平成十六年度　二松學舍大学人文学会役員（五十音順）

会　　長　野村邦近
運営委員長　川久保廣衛
運営委員　家井眞・磯水絵
　　小川晴久・五井信
　　（武永尚子）
研究委員長　磯水絵
研究委員　家井眞・小渕朝男
　　佐藤保・芹川哲世
　　高柳幸雄・寺山葛常
　　源川進・矢羽勝幸
編集委員長　小川晴久
編集委員　浅野進太・五井信
　　椎木伸治・白藤禮幸
　　林謙太郎・山口直孝
　　横須賀司久・渡辺了好
会　　計　武永尚子
会計監査　難波正久・松田存

≪編集後記≫

本号はいつもより薄目になってしまったことを編集委員長としてお詫びしたい。しかし本号には小論文が二つ採用されており、在籍中の学部学生さんのものや卒論をふまえたもので、会員の大多数を占める学部学生さんの投稿が増えていく兆しとしてよろこばしい。ただ本学の専任教師以外の投稿は査読によるチェックをしているので、院生、学部学生の投稿の成否は査読にかかっている。本学教師はます〳〵多忙となっているため、査読に三週間位の時間がほしいという強い要望も寄せられている。六月の総会で五月末の投稿原稿締切りを延ばしてほしい旨の要望が出されたが、査読、再査読と時間をかける必要が現実に出ているので、延ばすのは難しいのではないかと考えている。

本号がお手元に届く頃は終了しているが、本学は今年の八月二八・二九日漢文教育をめぐる国際シンポジウムを開催する。また七月二二日本学が平成16年度「21世紀ＣＯＥプログラム」研究教育拠点の一つに選ばれたことを各紙は一斉に報道した。「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」としてである。今後このような実践の報告や成果が本誌に陸続と発表されていくとよいのではないかと考える。日本の漢文教育は新しい視点で再興されなければならない。まず本学で使う漢文教科書の編纂が期待されるが、中国、朝鮮、日本の各分野からどのような漢文をどのような視点で選択するか、大いに論議されてよい。暗誦がキーワードとなり、暗誦にたえるものという基準も加わって。その実践は本誌を活性化させるであろう。

編集委員長　小川晴久